

呉錦堂を語る会通信

NO.15 Sep. 2014

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2014.9.15



蘇州に呉錦堂令孫、曹愛徳氏を訪ねる

呉錦堂の墓表には、「元配」（最初の妻）徐氏のほか、「繼配」（後妻）として丁氏と魏氏の名前があります。呉錦堂と魏夫人との間に生まれたのが呉魏瑶仙氏（1913年2月生まれ、2004年12月逝去）で、瑶仙氏の三女が曹愛徳氏（1935年12月生まれ）です。4月以降、曹氏との間で面会の日程調整を進めてきましたが、8月上旬、やっと、訪問が実現しました。（編集委員 橋雄三）

《『大人物小故事 我的外公呉錦堂』の誕生》

昨年、孫文記念館の資料室で『大人物小故事 我的外公呉錦堂』（以下、『大人物小故事』と略します）という、大変興味深い本を見つけました。この本の作者が曹愛徳氏でした。

『大人物小故事』は、母瑶仙氏からの聞き取りをもとにして生まれた18の短い話からなっており



《難忘錦堂》(*1)でインタビューに答える瑶仙氏

ます。今年に入って、私は、その全てと「前言」、及び「後記」の日本語訳を作りました。と同時に、『呉錦堂を語る会通信』（以下、『通信』と略します）に載せたいと思い、3月、曹愛徳氏に手紙を書きました。すぐに、快諾の返事をいただき、早速、『通信』に掲載を始めました。なお、曹愛徳氏の住所については、三江会館の姜成生理事を煩わせました。

この過程で、直接お会いしたいという気持ちが強くなり、4月以降、蘇州在住の私の知人を通じて、曹氏との間で面会の日程調整を進めてきました。このたび、やっと、日程が決まり、8月上旬の中国旅行となりました。

氏の住居は、蘇州市の干将東路(*2)沿いの中層集合住宅の1階にありました。一男、一女、二人のお子さんは別に家庭を持っておられ、ご主人、

姜晋楚氏と二人だけの生活とのことです。

曹愛徳氏は、長く、蘇州の中学（日本の中学と高校を併せたもの）で音楽の教師をしてこられました。今もピアノを教えておられます。また、つい最近も、ご夫婦でヨーロッパ旅行をされたとのことで、至ってお元気です。

ところで、ご主人、姜晋楚氏は『大人物小故事』誕生において非常に重要な役割を演じられました。お母さん、瑶仙氏は晩酌を嗜まれ、酔うほどに、両親のこと、自分のことを好んで話されたようです。そのお相手が姜氏だったのです。そしてまた、姜氏は、それをきっちり記録されていたので、この本ができたということです。夫婦合作です。

そして、もうお一方、執筆・発行について、後押しをされた方がありました。曹氏ご夫妻が通う教会の牧師さん、汪曉明氏です。この方は、『大人物小故事』の「新版」で序文を記されています。

(*1) 《難忘錦堂》は呉錦堂の生誕140年を記念して作成され、CCTV4（中国中央テレビ中国語国際放送）で放映されました。瑶仙氏は当時、83歳。

(*2) 「干将東路」の「干将」は『呉越春秋』に登場する名剣、あるいはその製作者の名であり、いかにも蘇州らしい通りの名称です。



曹愛徳氏に『通信』既刊号をプレゼント

蘇州に呉錦堂令孫、曹愛徳氏を訪ねる（続き）

この頁では、曹愛徳氏所蔵の写真2枚を紹介いたします。

《 曹さん三姉妹、帰国—神戸から上海へ— 》

「日中の戦争が激しくなって、私たち姉妹は祖母に連れられ、帰国の途に着きました。写真は香港行きの船上で撮ったものです。香港を経て、両親が待つ上海までの旅でした。祖母に抱かれているのが私です。このとき、4歳だったと思います。一番上の姉は既に亡くなりましたが、すぐ上の姉は、今も南京で健在です」（曹氏の話）



《 曹愛徳氏、2010年来日。72年ぶりの日本 》

このときの記事が、孫文記念館館報2010年12月発行『孫文』6号に載っています。

* 呉錦堂の孫娘来館

9月21日、呉錦堂の孫娘にあたる曹愛徳（76才）・姜晋楚夫妻が来館された。曹さんは神戸に生まれ、4才まで神戸で過ごした。母方の祖父は呉錦堂である。戦争中の1938年に、両親と共に帰国、現在は中国蘇州市在住で、72年ぶりに実現した今回の日本訪問を大変喜んでおられた。

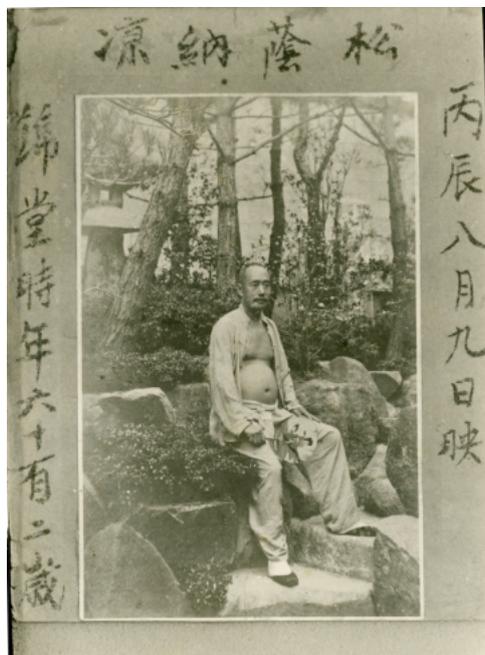
曹さんは移情閣の階段をゆっくりと踏みしめながら登り切って、移情閣二階の窓から静かに遠くの海を眺めていた。幼いころの記憶が甦ったかのように、日本の童謡「お手々、つないで」を口ずさまれた。「この歌はみんな仲良くしようねという意味、それは母が教えてくれました」と曹さんはいう。

短い参観が終わって一行は帰途につかれ、舞子駅に戻る連絡橋から再び移情閣を振り向くと、夕陽の輝きに包まれた移情閣の屋根が眩しかった。（蔣海波記）

《 1916年、移情閣前の緑陰で涼をとる呉錦堂 》

当『通信』14号第1面で、呉伯瑄氏所蔵の掛け軸を取り上げました。湯上り姿で孫を膝に抱いた呉錦堂が描かれた掛け軸です。軸の上部に賛があり、「丙辰七月既望浴罷抱次孫伯瑄納涼於移情閣前緑陰…」と記されております。つまり、1916年、旧暦7月16日の出来事ということです。これは画で、元になった写真があると思っておりましたが、曹氏宅で、同時期に撮られた写真を見つけました（下の写真）。これには、写真の台紙に撮影日ほかか記され、「丙辰八月九日映」となっております。

移情閣が新築なったこの時期、庭の緑陰等で、同じような写真が何度か撮影されたのでしょう。貴重な写真です。



曹愛徳氏所蔵

《 曹氏の2010年来日の様子は中国のテレビでも放映 》

2010年の来日の際の様子を中国のテレビ番組「新聞夜班車」で放映されました。下の画像、移情閣前の曹愛徳氏ご夫妻は、その一コマです。



大人物小故事 (9)

我的外公吴锦堂 曹愛徳著

ここでは、「厚愛」を載せました。お楽しみください。なお、日本語訳は編集委員橋雄三が担当しました。

厚愛 --- 洗脚

当时我外公在日本身为百万富翁，但他待人热情厚道，即便对家里的佣人也丝毫没有一点架子，所以佣人把他当作“老爷”，又把他当可敬的长辈爱戴他，我外公也把他们当作朋友来关心，爱护他们。因此，佣人都愿意向外公倾吐自己的心里话。

有一天晚上佣人给外公洗脚，外公觉得她的脸色和情绪与往常有点不一样，于是外公就亲切地问佣人：“阿姨，你有什么心事呀？”佣人知道外公一天的劳苦，不忍心让老人家增添忧愁，就说：“老爷，没什么，只是身体有点不舒服。”我外公观察她说话时吞吞吐吐的，猜出她心里必有心事，就开口对佣人说：“你对老爷尽管直说吧，不要有顾虑！”于是那佣人就讲出实情：“国内浙江老家来信讲：家乡闹灾荒，婆婆，孩子都病倒在床，住的小屋摇摇欲坠，租税更是交不出来。”急的不知如何是好，边说边哭，一连串的困难压得佣人喘不过气来。我外公听了深表同情，并安慰他，不要急坏了身体，同时立即动笔写信，盖了印章，对佣人说：“你赶快将此信寄到浙江锦堂师范学校，他们会取钱给你们家中暂渡难关的。”还同意让她回家看望老人和孩子，那佣人听了热泪滚滚，立即跪在我外公面前，感激得说不出话来……我外公连说：

“快起来！快起来！你洗好脚回去准备准备吧，明晨早点动身！”。



外公和日本友人合影

深い愛 --- 足を洗う

当時、祖父は日本で百万長者になっていましたが、人には心を込めて親切に接し、たとえ家の使用人に対しても、いささかも威張った態度はとりませんでしたので、使用人たちは祖父を“旦那さま”と慕い、また、年長者として敬愛し、祖父も使用人たちを友達のように気にかけて、いたわりました。それで、使用人たちはみんな、祖父に本心で話をしたいと思っていました。

ある日の夜、使用人が祖父の足を洗っていましたが、祖父は彼女の顔色、雰囲気、少しいつもと違うことに気づき、彼女に、「何か心配事があるのか？」と、やさしく訊ねました。使用人は、祖父の一日の苦勞がわかっていたので、ご主人に心配をかけるに忍びず、「旦那さま、何もありません、ただ、少し気分がよくないだけです」と答えました。祖父は、彼女が話すとき、言葉を濁すのを見て、彼女に必ず心配事があると思い遣り、彼女に、「遠慮なく言いなさい。何も気にすることはありません」と言いました。それで使用人は、「国の浙江の実家から、手紙で、飢饉に見舞われ、姑と子供は皆、病気で寝込み、住んでいる小さな家はぐらぐらして今にも倒れそうで、とても税は納められないと言ってきました」と実情を話しました。彼女は、気が急いで、どうしてよいかわからず、次々やってくる困難に押しつぶされ、息も切れそうに泣きながら話しました。祖父は使用人の話を聞いて深く同情し、彼女を慰め、気を揉んで体を壊さないようにと言い、即刻、筆をとって手紙を書き、印を押して、「急いでこの手紙を浙江の錦堂師範学校宛に出しなさい。そうすると、彼らはお金を下して、あなたの家の人に渡すので、あなたの実家は、しばらく窮地をしのぐことができるでしょう」と言いました。また、祖父は、彼女を実家に帰らせ、老人と子供を見舞うことを承知しました。使用人はこれを聞いてとめどなく熱い涙を流し、即座に祖父の前に跪き、感激して口をきくこともできませんでした。祖父は続けて、「さあ、立って、立って！私の足を洗い終わったら、戻って準備をしなさい。明朝早く出立しなさい」と言いました。

左の欄、中国語文中の写真の補足

この写真は、2001年6月30日、(財)孫中山記念会発行『孫中山記念館(移情閣)概要』に掲載があり、「鐘紡の監査役に在任中の呉錦堂 右から武藤山治、呉錦堂、八木与三郎(『鐘紡百年史』より)」とコメントが付いています。

大正15年1月16日付神戸新聞に掲載された呉錦堂死亡記事

呉錦堂は1926年1月14日、死去しました。神戸華僑歴史博物館所蔵「陳徳仁コレクション」に、大正15年1月16日付神戸新聞掲載呉錦堂死亡記事のコピーがあります。判読できない箇所が多くありましたので、県立図書館のマイクロフィルムで検索、拡大閲覧し、ほぼ、書き起こすことができました。新聞面のコピーと書き起こした本文の双方を下にあげます。(編集委員 橘雄三)



(注) 新聞文面中、旧字体、並びに歴史的仮名遣いは、人名以外は基本的に、それぞれ、常用漢字、現代仮名遣いに統一して書き起こしました。

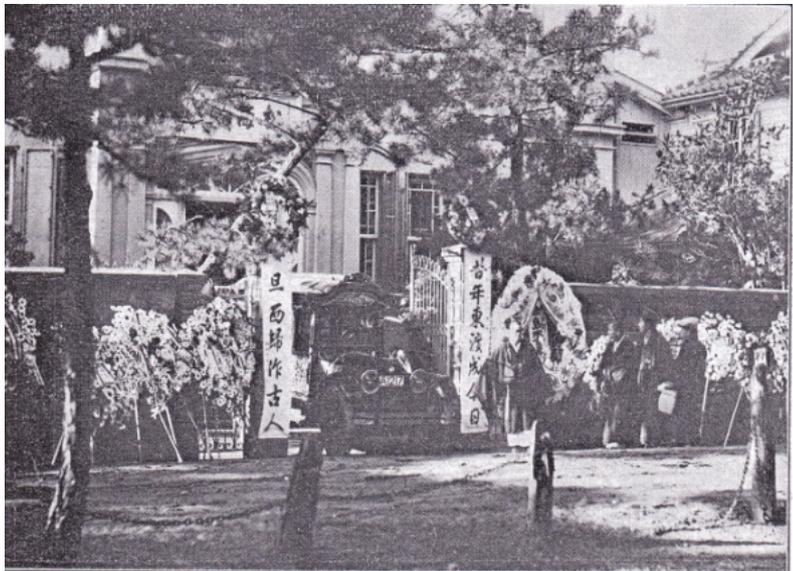
神戸在住帰化支那人で実業界に重きをなしていた呉錦堂(七二)氏は老齢のため最近著しく健康を害していたが旧臘舞子の別邸から神戸市籠池通六丁目の新邸に移移つて間もなく風邪に罹り急性肺炎を併発して北長狭野病院長佐野譽博士の手当を受け自宅で療養に努めていたが十四日午後六時遂に不帰の客となった、葬儀は十七日午後二時より下山手通八丁目支那人墓地にて営まれる

同氏は在留支那人中の古参者で明治十九年初めて長崎に渡来貿易商を始めその後大阪に移住し更に同二十五年神戸に引移つて綿花豆粕の貿易を開始し非凡の手腕によって成功し三十七年日本に帰化して更に実業界に活躍現に東亜セメント、東洋燐寸、大阪莫大小等の諸社に關係している

日露戦役の軍事公債応募陸海軍軍資献納死傷病兵遺族の扶助等に力を尽した功によって明治三十九年四月勳六等瑞宝章を授けられ銀杯一組を下賜され爾来一層公共慈善に励み寄附金の総額は六十万円にも達しているといわれている、一方故国に対しても公共事業に力を尽くし大正十三年五月中華民国政府から勳二等嘉禾章を授与されている

補足

新聞記事中、「旧臘」は、「去年の暮れ」の意。また、新聞記事と楊寿彭編『呉錦堂先生哀思録』との表現の違いを二点あげておきます。一点目、呉錦堂の終(つい)の住所として、前者では「籠池通六丁目の新邸」、後者では「上筒井別邸」となっております。二点目、呉錦堂を診察した医師として、前者では、佐野病院長佐野譽博士の名のみ出ていますが、後者では、ほかに、京都前医科大学校長中西龜太郎博士と兵庫県立病院長西廣吉博士の名も見えます。



松海別荘を出る霊柩車 楊寿彭編『呉錦堂先生哀思録』より